

# プロフェッショナルな審判は動揺するとアンフェアになるか

1250412 江見樹生

指導教員 林良平

## 研究背景

スポーツ競技において審判は常に公正な判定を求められる。誤った判定は競技者を含めた両チームやその応援者らに不利益をもたらす危険性がある。そこで近年、ビデオ判定のシステムが導入され誤審を減らす取り組みが行われている。このシステムにより審判の判定の誤りがその場でビデオ判定によって明らかになる。本研究では、ミスの許されないプロスポーツの審判による誤審がその場で明らかになったとき、審判に動揺が生じ、不利な判定を受けたチームに対してその後有利な判定を与えるのかを調査する。

## 研究目的

本研究では、競技規則に則り公正に判断すべき審判が自らのミスが公になることによって動揺し、自らの判定によって不利になりかけたチームに対してその後、有利な判定をするか検証することを目的とする。

主審がミスをした後に、不利な判定を受けたチームに対して有利な判定をすることが分かれば、公正な判定を求められる役割を与えられた人でも自身のミスを隠すというモチベーションを優先することが分かる。

## 研究方法

本研究ではイングランドのサッカーリーグである Premier League で 2023 年から 2024 年にかけて開催された 1 シーズン 380 試合のデータを用いた。その中からビデオによる 104 件の判定とその判定があった試合を対象とした。そして、それぞれのビデオ判定の有利さおよび不利さが、判定前後のファウル数を変化させるかどうかを検証した。そのために重回帰分析を行った。

## 分析結果

ビデオ判定前後のファウル発生頻度を目的変数とし、判定がホームチームとアウェイチームのどちらを対象としたものか（判定対象ダミー変数）、判定が有利あるいは不利であるか（有利・不利ダミー変数）、残り時間、自チームダミー変数、相手チームダミー変数、ビデオ判定の回数ダミー変数、ADT（アディショナルタイム）ダミー変数を説明変数として重回帰分析を行った。その結果、残り時間のみ有意でそれ以外は有意ではなかった。

## 結論

ビデオ判定により主審のミスが明らかになっても、その前後で主審の判定の傾向に違いがあるとはいえない。主審は自らのミスがその場で明らかになっても、そのミスから判定傾向をかえるという不正は行わない。人は公正な判断を求められる役割を与えられれば、自身の不正をしたいというモチベーションを優先せず、役割に寄せられた他者からの期待に応えようとすることが分かった。